

議 長	局 長	課 長	課長補佐	係 長	課 員
					

様式第4号（要綱第3条関係）

令和 6年 12月16日

田村市議会議長 大橋 幹一 様

会 派 名 無 会 派

代表者名（議員名） 二瓶 恵美子



政 務 活 動 報 告 書

区 分（○で囲む）	☒ 調査研究 ☐ 研修 ☐ 広報 ☐ 広聴 ☐ 会議 / 要請・陳情活動
期 間	6年11月17日（日）～18日（月）
参 加 者 氏 名	二瓶恵美子
訪問先の応対者 〔名刺の写し添付〕	別紙 名刺 添付
工 程	1日目 滝根～山形県新庄市 キトキトマルシェ～市内泊 2日目 ホテル～新庄市 市役所～田村市・滝根
場 所 〔調査、研修、訪問先 要請・陳情場所等〕	山形県 新庄市 十日町（新庄市エコロジーガーデン） " 新庄市役所
内容・成果等 （別紙添付も可）	1日目 昭和9年、国の旧農林省蚕糸（さんし）試験場新庄支場が開設。（福島県にも同時期、こうした蚕糸試験所があったことを知る。）半世紀以上に渡り、新庄の農業に貢献したこの試験所は、歴史的な使命を終え平成12年に施設を閉所した。こののち、新庄市が、この跡地を国から払い下げして、平成14年9月に新庄市エコロジーガーデン「原蚕の杜」としてオープンする。 風格ある構えの建物群は、国の有形文化財に指定され、このノスタルジックな一帯の雰囲気は、地域住民の愛郷心を奮い立たせる源になっていると、その地に降り立って強く感じた。施設一帯は、市が管理する。 現在、施設は、エコロジーガーデンとの総称の下、多目的ホール、文化交流スペース、食品加工や、調理教室が出来るキッチン、カフェ、産直の【まゆの郷】で、賑わっている。 さて、この場所で行われる本年最後の開催『キトキトマルシェ』に、間に合うタイミングで研修をさせていただいた。キトキトの名前は、



青虫の歩く様子を 新庄方面では、キトキトと表現するらしい。きっと、このマルシェの名前は、青虫のようにゆったりと進む姿にも、大きく成長すると、きれいな蝶になる希望と期待の思いをマルシェに重ねたとのことだろうと想像した。代表の吉野様は、そこまで考えていなかったと、キトキトマルシェの意義の名言はしなかったが、ブランド作りや、デザインを生業にしている方なら、そうした意味も含んでの命名だろうと察した。

豪雪地帯の新庄市は、5月にならないと野外でのイベントは開催できないらしく、11月までの月一、毎月第三日曜日に開催、年間7回だけのマルシェである。年内最後、クリスマスを迎えてのマルシェらしく 会場を流れるBGMも心浮かれる曲で、若者、子ども連れの市民や市外(県内各地の車のナンバーが駐車していた)の人たちで、大変賑わっていた。2012年に始まって以来の暖かな日よりとのことで、出店者も楽しんでの開催だったらしい。

地元高校生、大学生の6次化製品のブースが多く、地元のお茶屋さん、花屋さんもテントを連ね、若者が好む、こじやれた装飾で店頭の商品並べ販売していた。お隣の秋田から来られた出店者は、ジビエ料理、しかも、熊の肉汁！一杯、勧められたが、さすがに食欲がわかず戸惑っていたら、「待ってたよ！これ食べたくて、来たよ！」との声が！常連さんらしい。軽トラから降りてきた矍鑠したご老人の方は、毎月、来る！とのこと…どうやら、目的があるらしく、そうした、高齢者のお客も多くあちらこちらで姿を見受けた。

マルシェのきっかけは、雰囲気と、ロケーションが良いこの場所を生かしたいために、交流拡大実行委員会を行政主導で進めるが、一度の補助金支給(イベント用のテント 数張分)だけで、翌年からは、一般市民の有志だけで『キトキトマルシェ実行委員会』を設立、開催しているとのこと。この実行委員のメンバーは、成り行きで集まった人々であって、このマルシェを自分たちが楽しむ為に行うことを目的とした『とても ゆるい人間関係』で成り立っているとのこと。案の定、学生たちの頑張っている姿に、感銘を受けた私の言葉に「学生たちは自ら参加している。人を育てる！なんて おこがましくて 言葉に出せない」といって飄々した顔には、現在のメンバーたちが、真にマルシェを愉快地楽しんでいる姿を垣間見ることが出来た。

こうした大人たちの姿をみて、地元の学生たちは、自ずから、このマルシェの手伝いをするようになっているのだろう。そして、それは将来、この新庄を離れて行く、行かないにしろ、ひとつのテントの中で、人々とのコミュニケーションを育んで、たくさんの新庄の良さのきずきを見出すのであらうと痛感した。

年間の集客数は、徐々に増えていったが、コロナの影響で一度はダウンしたものの、今年度は回復しているとのこと。我が田村市と同等の人口なので、現地での熱気を感じる限り、何百万も費やしている田村市イチのあぶくま洞秋まつりの賑わいに等しい感じかと思われる。

市内には、キトキトにあやかって『キタキタマルシェ』と名を打って野菜を中心に販売展開している市(いち)や、市民のワークショップ『つくつくマルシェ』もあり、市民への関心や影響力は高いと感じた、

そして、近隣のそうした同種の店舗などとの客層のすみ分けはされていることも感じさせられた。そこで、市内外でのマルシェ開催が増えたとのこと。こうした良いモデルになった事例は、やはり人と人を結び地域を元気づける源に尽きると感じた。

今後は、作った人が商品の販売を担うコンセプトを崩さず、農林業で成り立ったこの地区を新たなマルシェという媒体で交流人口を増やし、観光地として盛り上げたい。そして、新しい風と力(興味)が集まるような場として、次世代に繋げて行きながら、運営の移行をしたいとの思いも語った。また、登録文化財で運営の直売所やゲストハウスは、全国的にも例がないので、異業種(ヨガ教室、写真店、等)などへの貸し出し施設として活用したい。現在、併設されている『産直 まゆの郷』には、年間12~13万人(レジ通過人数)の方が利用されている。との事。

実行委員の方々との懇談の後、隣の重厚で暗い倉庫に案内された。そこは、蚕種保護室といって、蚕の卵を用いた実験と保管を行なう建物で普段は立ち入り禁止の場所らしい。私を招いて、「ここに以前、東大の生徒たちが来て、バイオマスの研究をしていたが、うまくいかなかったのだろうね。すぐに撤退して行ったよ。」との説明に、私は、田村市での東大生のまちづくりの事業を、思い出し苦笑してしまった。

マルシェを後にして、市内の雪の里情報館に立ち寄った。代表吉野様のお勧め立ち寄り所らしく。新庄を訪れたら、新庄の歴史、暮らしに触れて行ってほしいとの思いらしい。昭和9年築のこの建物には、豪雪地帯の新庄市の雪国・農村経済に関する図書資料が4万点余り収蔵されていた。が……なんと、そこに、我が田村市の大越娛樂場の写真があった。どうやら、時の建築家、今和次郎は、新庄市にあった旧農林省積雪地方調査所の建設に携わっており、その建物が現在の雪の里情報館となっているとのこと。そして、その兄弟分の建物が唯一、国内では福島県の田村市の大越娛樂場に現存しているとのこと。そのことを知った私は、急に、新庄市への近親感を抱いた。

2日目

新庄市で、商工観光課の職員にお話をきいた。

当日、臨時議会が入ったとすることで、若いお二人の職員が対応してくださったが、新庄の歴史、蚕糸での産業、キトキトマルシェなどすべてのことに精通しているようで、お聞きすると、職員になってから、ずーと、この係、担当とすることで変に納得した。田村市の観光交流課内を鑑みれば、うらやましい限り、と…そして、もっと、驚いたことに…議会が終わったと言って、部屋にやってきた観光交流課長補佐は、前日にマルシェでお会いした、実行委員のお一人だったこと。作業服から、ビジネススーツの代わり映えに…目が点に……やはり、行政マンの知識と市民の活力が相伴った事業であると痛感した一瞬であった。

そして、行政の立場、現場の立場の意見が共有されていて、スリムな回答、スリムな新庄市の将来像であった。行政からの改めての説明は、国から譲り受けた趣のある場所から、新庄の賑わい作りを発信するた

めに、修繕費、約5000万を一般財源から支出し、解体する建物は、国交省から解体費の45%賄える補助金を利用して整備した。現在は、産直のまゆの郷が指定管理としているが、将来的には、直営で行えるよう自走の指導をしていく。

また、敷地内は、マルシェなどの使用の際は、市の設置管理条例に基づき、面積で算出、料金を徴収している。これは、マルシェに関わらず、どんな団体にも課す事項とのこと。我が田村市も、各種イベントによってバラツキがある土地賃借に関しては市民団体からは異論も届いている。今後、改善の余地があるのではないだろうか。

そして、行政として、今後、盛り上がっているマルシェイベントを後押しして、次世代の若手の市の担い手を育てたい。幸いにも、新たに市内には、職業専門学校も開設、こうした若い人の力を糧に活力を生みたい。

今後は、現在のエコロジーガーデンの公道側の空地に駐車場とトイレを併設した道の駅を作って、このエリアを、集客スポットにしたい。勿論、災害時の防災拠点としても活用できるように整備する。今年の夏の豪雨災害では被害者もでた。冬は豪雪地帯で、他の地区との行き来も大変な地域だが、春になって、冬がやってくるまでの季節は、新庄の四季を楽しんでもらうよう、マルシェでやってくる人々に、滞在時間を増やし、観光もしていつてもらいたい。との穏やかで悠々とした話しぶりに、新庄市の新たな将来の魅力に、エールを送る自分がいた。

週開けの月曜日にも関わらず、終始、笑顔で対応してくれた、男女の職員の姿に、ぬくもりを感じつつ、舞う雪を恨めしく思い、ノーマルタイヤの車で急いで帰路についた。

議 長	局 長	課 長	課長補佐	係 長	課 員
					

様式第4号（要綱第3条関係）

令和 7 年 1 月 2 4 日

田村市議会議長 大橋 幹一 様

会 派 名 無 会 派
 代表者名（議員名） 二瓶 恵美子 

政 務 活 動 報 告 書

区 分（○で囲む）	<u>調査研究</u> 研修 広報 広聴 会議 / 要請・陳情活動
期 間	令和 7 年 1 月 2 0 日（月）
参 加 者 氏 名	二瓶恵美子
訪問先の応対者 〔名刺の写し添付〕	別紙添付
行 程	滝根・自宅 7時発～あぶくま高原道 滝根IC～小野IC 常磐道經由、 北関東道路 桜川・筑西IC下車～国道50号線にて 帰路は、上記の逆行程
場 所 〔調査、研修、訪問先 要請・陳情場所等〕	茨城県 結城市
内容・成果等 （別紙添付も可）	●入学祝い品 ランドセル支給事業 担当 学校教育課 結城市が進める『徹底子育て支援』の一環として、令和元年度から開始。現市長はこの文言を公約に掲げて当選したので、すぐに新たな子育て支援を打ち出し、ランドセル贈呈は令和2年度からすぐに取りかかった。 目的は、子育て世代の経済的負担の軽減及び児童の健全育成であり、 概要としては、全7色から好きな色を選んで支給。支給されるまでの手順については… ・4月に事業実施通知を送付 ・5月に申込通知の発送 ・〃 下旬に展示会を行う ・6月に申請締め切り（色の決定） ・2月に児童世帯への発送 との流れになる。



予算は、令和5年度実績として12,783,092円(380個)仕様書に基づき、市内販売業者3社で競争入札にて購入。A4判やタブレットが入る容量で、6年間無償修理を伴う。

ランドセルの蓋の部分に結城市の市章を型押し等、児童の通学時の安全確保の防犯ブザーや反射材を含めた品目を基本とした規格を設けている。

今後については、ランドセルはおじいちゃん、おばあちゃんからの贈答品とし昔から慣習のひとつとしていたので、反発もあるかと心配していたが、すっかり定着してきており、市民の満足度も高いので、ランドセルの色や品質の改善を図りながら、引き続き事業の推進を図っていききたいとのこと。

実は、こうしたランドセルの支給事業は、茨城県では珍しくなく、県内44自治体で15自治体が実施している。

また、徹底子育て支援＝学校給食完全無償化にはまだ到達しておらず、第三子からの無償の実施とのことで、第二子からの無償実施の田村市の話にも耳を傾け、完全無償化は国の施策！に担当職員はうなずいていた。

その他、「誕生時の出産費用負担金や、3歳児、5歳児に現金(あえて、商品券にしなかった)での祝金(各5万円)や、就学児童、生徒が、この結城市で恵まれた子育て環境を感じとってもらい、結婚を機に結城市に戻って子育てをしてもらう女性を育てようと、今はそうした種をまいている時期でもある。」との言葉にも印象が残った。子育て環境が良くても、短期間によそから移住、定住を簡単に呼び込めない現実の中、長期にわたっての行政事業に市から離れた女性が、きづきを持って戻り、新たな家族という形で、結城市の賑わいを創出してもらいたいの思いであると察した。

●情報発信事業『Yui fam』について

担当 企画政策課

正式事業名は、移住・定住促進事業(子育て世代コミュニティ形成・情報発信)。

経緯には、結城市には、若者の望む働く場が少なく、進学、就職期の人口流失が課題となっている。また、結城市の魅力、価値を十分に把握しないまま、他自治体に転出する若者がいる。こうしたことから、子育て世代を中心とした市民の多様な働き方の支援や地元愛の構築を図り、この地への定住につなげる事業が必要であると考えたらしい。

事業の目的は、20代から40代の子育て世代を公募して、市民編集者の養成や地域コーディネーター的視点を持った人材を発掘、育成するとともに、子育て世代を中心としたコミュニティを形成する。また、成果物として、リアルな目線からの市の魅力、価値を市内外へ効果的に発信できる子育て世代向け情報誌(Yui fam)を作成し、結城市のブランドの向上のほか、市への興味、関心を引き起こし、将来的

な定住促進及び、関係人口の創出につなげていくことを目指しているとのこと。

事業の運営について、事業委託者には、常に市の情報収集に努めてもらい、事業の進行管理や成果等については、連携を密に情報共有を図りながら事業展開を行うことや、3年程度ごとに、業務に関する有益な提案などを積極的に行うことを求めている。

実績として

令和4年度は業務委託費 約99万円で発行部数が3,000部。

令和5年度 " 約150万円 " 6,000部。

令和6年度 " 約148万円 " 4,000部。

(イベントに出店、アンケートを実施)

今後については、市民の編集参加者からも好評を得ていることから、市民意識の醸成による定住化の促進や関係人口創出のために、市民による自主事業として自走できる取り組みが必要と考えるとのこと。

また、メンバーの選任や報酬については、公募形式とし、報酬支払いは発生していない。

掲載内容の制限については、メンバーの主体性を重視し、市民目線のメディアとするため、掲載内容の制限はなく最低限だけのものを設けている(政治、宗教目的でないこと。市政に対する要望、陳情でないこと。メンバーの営利目的でないこと等)。

また、複数開催する編集会議では、事務局(行政、委託業者)が、校正や取材先への内容確認を行うことでチェック体制を整備している。

●その他

1時間以上にわたる行政視察を終え、議長室や議場に案内された。議場の液晶パネルには『歓迎 田村市議員 二瓶恵美子』の文字が流れていて、結城市の子育てにも見受けられる細やかな配慮を感じた。

また、議場の右端のガラス張りの席は、子育ての親子のための席らしく、子どもが少々ぐずっても、声が議場に響かないように整備されている。また、帰り足に寄った、結城つむぎセンターの売店レジの若いお母さんは、1歳くらいのお子供さんをエルゴで抱っこした姿でお仕事をされていた。こうした、行政や徹底子ども支援施策に同意を表している民間事業者の積極的な職場環境づくりに官民一体を感じ取った。さらに、「ここ2～3年の間に、こじやれたランチができる食事処が増えました」との担当職員の言葉に、子育て世代に評価されているとの自信を感じ取りながら、結城市を後にした。